

CARAVAN

「やまがたLifeポジティブキャラバン」 令和6年度の講演レポート

山形県内の多様な業界で活躍する方々を中学校に派遣し、
“山形を舞台に自己実現していく生き方”のロールモデルを実体験やエピソードを交えながら紹介。
「山形はすごい!!」と地元の魅力について考える機会を提供しました。



東根市立神町中学校

GUEST SPEAKER

講師

小嶋 健市郎 さん

(株)小嶋総本店代表取締役社長 24代蔵元

Profile

米沢市出身。大手衛生用品メーカー、米国の貿易会社を経て、小嶋総本店に入社。同社の主力銘柄である「東光」は、自然エネルギーで造られている全量純米酒として、地元のみならず県内外のファンに親しまれている。また、約20か国への輸出も行っている。酒粕を活用して発電された再生可能エネルギーで日本酒を製造するなど、持続可能な生産活動に力を入れている。代表理事を務めるまちづくり会社「ウコギ社」では、地域課題の解決に向け、シンポジウムの開催や地域のマネジメントに携わるなど、様々なまちづくりの活動を牽引している。

LECTURE

講演

田舎者ほど田舎を知らない
価値に気付いていないだけ

30歳の時にアメリカから米沢に戻ってきて13年が経ちました。戻ってきて感じるのは山形には「ここには何も無い」という人が多すぎるということです。田んぼを見て「何も無い」という人は価値に気付いていないだけなんです。

「何も無い」というときは大体、都会にあるような消費地としての豊かさを指しています。確かに都会には人を楽しませる消費地としての豊かさがあります。でも、一流の商品としてありがたく扱われている食材は山形などで作られています。生産地としての豊かさがある。実は有名な野球選手が食べているのは南陽市で生産されているお米だったりします。

世界で一番ありがたく飲まれている日本酒は山形で造られていたりします。

田舎者ほど田舎を知らない。ただ鈍感なだけなんです。自分のことを知ると同じくらい、地元のことを知るの大事です。自分を形成してきた土地のことを知らないのは恥ずかしいことです。なので、いつもとは違う目で見てもらいたい。

私もそう思って中学校を過ごしてきたわけではありません。大人になって地元に戻ってきて、自然などを学ぶようになって、山形がすごくいい場所だと感じました。見えていなかったものが見えるようになりました。皆さんの時代は世界とつながる時代ですから、ぜひここで生まれ育ったという個性を大事にしてほしいと思います。





小国町立叶水中学校

GUEST SPEAKER

講師

小林 舞香 さん

画家・壁画師

Profile

1986年東京都生まれ。アクリル絵の具を使用した手描きによる精密な写実画を特徴とした作品を制作。2010年から画家として活動を始め、山形出身の知人の縁で、2020年に山形市七日町の「シネマ通り」の店舗のシャッターに壁画を描くプロジェクトに参画。また、蔵王温泉に滞在して創作活動を行うプロジェクトを通じて、山形の自然や食、温泉、人々の温かさに魅了され、2021年4月より山形市に移住した。壁画制作、舞台美術、ブランドや企業との商品コラボレーション、音楽アーティストへの作品提供など多岐にわたり創作活動を続ける。

LECTURE

講演

人生は気の合う
仲間・モノ・場所と出会う旅

好きなことを仕事にするのは難しいと小さいころから言われてきました。なので絵はずっと好きでしたが、周りに流されるように大学に行きました。

そんな中、小さいころ一緒に「イラストレーターになりたい」と言っていたライバルと成人式で再会しました。その友人から「今度個展やるから来てよ」と言われて、すごくショックを受けました。その友人は夢を持ち続けていたんです。そして絵を職業にすることは怖かったけれど、大学を辞めて専門学校に入り直しました。

その後は全国を壁画を描いて回りましたが、山形の街中で絵をかいていた時、ほかの県と違うことがあったんです。

それは街の人が差し入れをしてくれたことです。七輪を持ってきて芋を焼いてくれたこともありました。

仕事が終わって東京に帰った後も、これまでこんなに濃い期間を過ごしたことがなかったと山形での生活を振り返ることが多くあり「よし、移住しよう」と思い立って山形に移り住みました。

人生は気の合う仲間・モノと出会う旅だと思います。私は絵と気が合います。いつまでやっても飽きません。そして私は気の合う場所にも出会えた。それが山形です。だからいま山形に住んでいて心地いいし、幸せです。自分で選んだ場所だから。絵も「売れない」「依頼が来ない」時期もありましたが、気の合うことをやっていたら大したことはありません。このスローガンが頭にあれば、どんなことも乗り越えていけると思います。





酒田市立第二中学校

GUEST SPEAKER

講師

吉野 優美 さん

一般社団法人 最上の暮らし舎 代表理事

Profile

1988年、東京都生まれ。山形県新庄市在住。文化女子大学現代文化学部国際ファッション文化学科を卒業後、都内の制作会社に入社。東京在住時に東日本大震災を経験。その後、フリーランスとしてスタイリング、企画、制作、運営を担当。のち、ソーシャルデザイナーとして様々なプロジェクトに携わる。2014年からは「最上伝承野菜」のブランディング事業に関わり、山形県新庄市と最上地域を取材で行き来する中で、地域との繋がりを深めたいと感じるようになり、地域おこし協力隊として新庄市へ移住。『空き家プロジェクト』を立ち上げ、暮らしに密接した活動に取り組む。その延長で、2017年9月に一般社団法人「最上の暮らし舎」を設立。2024年4月より、commune AOMUSHI株式会社の取締役役に就任

LECTURE

講演

“課題は宝” 仲間づくりのきっかけになる

大学卒業後、最初に都内の制作会社に就職し、制作現場での経験を積みました。この時期に東日本大震災を経験し「イベントの力で社会に何かできないか」と考えるようになりました。その後、フリーランスとして制作現場で活動し、人々を楽しませたり喜ばせたりする仕事の楽しさを感じました。その中で、より地域に根ざした活動をしたいと思い、地域おこし協力隊の存在を知りました。新庄市ではワーキングスペースを立ち上げ、「課題を解決する場づくり」に努めてきました。やりたいことがあった時には仲間と出会うことが最短のルートと考え、その行動として、知り合った仲間と情報交換することで、課題が一つ一つ解決していきました。

『課題は仲間づくりのきっかけ』になる。つまり、『課題は宝』だと思います。困ったときには、自分の中で抱え込まず、誰かに話すことが大事です。例えば、雪下ろしや雪囲いも大変ですが、納豆汁を用意し「一緒にやろう」と誘ってみたりすると、大変な作業が仲間とコミュニケーションをとりながら楽しくやれる活動に変わります。

ダニエル・キムさんという社会学者は、組織が成功するために一番重要なのは「関係の質」だと言っています。周りの人を想う「関係の質」が高ければ、何が必要かを考え、行動し、結果につながります。「社会貢献をしよう!」という結果よりも、自分が面白いことを考え、周りの人の笑顔が浮かぶのであればやってみれば良いと思います。失敗しても課題を通じて仲間が出来ます。それを続けていけば酒田から世界に発信できるものが生み出せるはずですよ。





真室川町立真室川中学校

GUEST SPEAKER

講師

三浦 友加 さん

料理家・タレント

Profile

2004年より吉本興業で芸人・タレントを経験。2011年5月より初代「山形県住みます芸人」として活躍した。2019年から酒田市を拠点にフリーランスとして活動し、食や地域に関わるイベントの企画や司会などを行う。薬膳インストラクターとして山形の郷土料理、出羽三山精進料理、おばあちゃんの知恵袋、ヴィーガン、SDGs問題などを取り入れた里山薬膳カレー「ミウラのユカレー」を開発し、キッチンカーやレトルト食品として提供している。山形土着の文化、在来野菜など“次世代に残したい大切なもの”を探しながら暮らしている。

LECTURE

講演

誰にも言えない希望は
「夢・現実ノート」に書こう

私が小さいころはテレビつけてもラジオつけても都会に憧れるようなドラマがあり、田舎がちよっと窮屈だなと思っていました。しかし実際に東京に住んでみると、都会は夢がある人にとってはキラキラしている場所ですが、夢を持っていない人には本当に残酷で、生きていてつらい気持ちになって引きこもりになってしまいました。引きこもっている間はテレビやラジオをつけっぱなしの生活でした。そんな中で知ったのが「放送作家のニュースターを探せ」という番組で、それが芸人になる最初のきっかけでした。お笑いの世界は売れば大スターですが本当に厳しい。私はビビりで自信もないので、成功するのはまず無理だと思っていました。

でも自分が80歳のおばあちゃんになった時に、「若いとき芸人を目指しておけばよかった」と思う姿が想像できました。一生後悔するなら、駄目で元々でいいから飛び込もうと吉本興業の養成所に入りました。

当時は自分が叶えたい希望を「夢・現実ノート」に書いていました。例えば当時は「大好きな先輩芸人に会いたい!」と書

いていました。その先輩はアートが好きだったので、スマートフォンのカバーを手作りして持ち歩いていました。馬鹿にされることもありましたが、先輩なら分かってくれる気がすると思いい、続けていました。すると知り合いのライブで本人に会うことができました。そしてスマホカバーをほめてもらい一緒に作ることになりました。さらに、その先輩がMCをしている番組に出演することにもつながりました。このように、いま当時のノートを見返してみると意外と叶っていることが多くあるので、おすすめです。

